



東京都小金井市立緑中学校 3年

山下 理紗

多様性を認め合う思いやり

私は、障害者への思いやりとは、物理的、制度的なものだけでなく、心の中の障壁も無くし、多様性を認め合うことだと思う。障害者を支援される側として一方的に捉えるのではなく、心身の特性に合わせて一人一人を理解することが肝要だ。

私達は自分と異なる特性を持つ相手に対し、理解することが複雑で面倒だと感じ、距離を置いてしまいがちだ。根拠のない分類をし、レッテルを貼り理解したつもりで相手の判断を終わらせてしまう。相互理解を妨げる壁があるならば、それは、固定観念、偏見や差別の壁だと考える。傷つくことや傷つけることを恐れて距離を置くのではなく、共に過ごし考えや気持ちを交わし合うべきだと思う。その先には、信頼関係が芽生え、相手を尊重し多様性を認め合うことが出来るのではないだろうか。

現在、身体障害、知的障害、精神障害のある53万人以上の人々が就労している。職業は多岐にわたり活躍されているが、時代を遡れば、障害者を雇用する場所も職種も現在より少なかった。障害に合わせた様々なコミュニケーション方法で職場に適応するための相互理解を深め、時間をかけ信頼を得ることで職務の新たな選択の幅を広げてきた歴史がある。困難を乗り越え、障害のある従業員が長期定着している職場では、相互理解を育む努力が実を結び、特性に応じた得意分野を花開かせ、誇りをもって就労しているようだ。

活躍を支えているのは、障害があっても仕事に取り組める色々な工夫だ。指示語を使わない、ゆっくり話す、大きな文字で書く、図や絵を描き理解を促す、身体の負担が少ない短時間勤務など、相手に寄り添うことで発見できた思いやりの工夫だと思う。悩みを共有してくれる仲間がいることは、とても心強いものだ。相手が望むことを心の中で思うだけでなく、語り掛け、解決策を現実化することを諦めない行動が、相互の未来を切り開いていくと私は思う。共に過ごすことで生まれた気づきが、延いては社会全体を変化させていく礎になり、義肢や補聴器のような逆境を乗り越えられる物の新たな誕生や技術進歩をもたらすと思う。

世界的にダイバーシティ（多様性を活かす）を重視する場が増加する中で、様々な心身の特性を持つ人があらゆる分野で活躍できることが共生社会の要だと考える。社会的障壁を無くすために試行錯誤しながら思いやりの気持ちを行動に移し、全ての人々が心豊かに暮らせる未来を目指したい。